

明治初期の論議言説と仏教論議史研究 ―雲英晃耀を中心に―

久保田 實

一 はじめに

近年の日本仏教における「論義」の研究は、高まりを見せている。その頂点にあるのが、楠淳證を中心にした研究である。二〇二〇年に刊行された『日本仏教と論義』に、その成果が集められている。構成は第一部が「法相・華嚴の論義」。第二部が「天台・真言の論義」。第三部が「論義と諸文化」という構成である。楠は、法相の唯識学・因明学を専門領域として実績を上げている。この論文集では、こうした専門領域を越えて、最も古い法会・思想を含む南都の論義から、宗派を越えて展開していった論義、更に芸能・文学・社会現象との関りにおけるまで、法会の中の論義のみでなく、根底に対論としての論議が想定できる分野を研究対象に捕らえている。^① 仏教における論義の研究の射程を、ここまで広く豊かに見据えた論文集は、初めてであり、今後の日本仏教の論義研究の可能性を示したものと大きく評価できる。その編集後記において論義研究の重要性について「今後の東アジア仏教・文化研究にあたり、欠かすことのできない領域」としている。^②

こうした日本を含む「東アジア仏教・文化研究」に「欠かすことのできない領域」と考えられる論義の研究は、

近代の学問の自由と広がりの中で、「論議研究」という領域を、今まで一度も形成できなかった。仏教の学問的研究領域も大きく広がったにも関わらず、「仏教論議」という研究領域は形成されなかった。不思議である。全くなかったわけではない。そうした研究領域の起点となりそうな二つの研究が明治にはあった。この二つの先行研究は、互いに近くにはいたが出会うことなく、それぞれ終息に向かう。

交わることはない二つの先行研究の、一つは明治初頭の一〇年代から、三〇年代にかけて雲英晃耀きらこうようが行った因明研究である。因明とは、仏教の根幹にある思考法を追求する研究である。この中で論議史が研究された。今一つは、戦後の仏教研究の起点となった大著『日本仏教史』全十巻を書いた辻善之助の研究である。辻の明治末期の研究を検討すると、そこに論議史研究を見出すことができる。

この二つの研究は、前者が明治二十年代、後者が明治三十年代からの研究である。したがって近代に入って、最初の仏教論議の研究は、雲英晃耀の因明研究の中で生まれた仏教論議研究である。それがどのように生まれ、どのように継承され、どう終息したかを検討する。

二 雲英晃耀の仏教姿勢

雲英晃耀きらこうようは、天保二年（一八三一）に、三河国（愛知県）一色町にある真宗大谷派の寺院安休寺に、第二十二世雲英元了の長男として生まれた。安休寺は、観応の擾乱に足利直義を支えた同族吉良満義の没後、その菩提の安らかなることを願って、次男有義が延文二年（一三五七）に創建した。有義は真西と号し、初代開山となり、寺名南潮山安休寺とした。寺内に吉良満義・一色有義の墓がある。従って雲英晃耀は、足利一族の吉良氏の末裔であり、

由緒ある氏寺に生まれたのである。幼にして学を好み、近くの源徳寺本法院義讓の門に入り学ぶ。ところが父元了が、天保十三年（一八四二）に妻子五男一女を残して亡くなる。晃耀は十二歳で、二十三世の重責を担う。弘化三年（一八四六）十六歳で、京に上り、東本願寺高倉学寮（以後「学寮」とする）に入る。そして安政五年（一八五八）、二十八歳になった雲英晃耀は、初めて学寮の副講として壇上に立った。これ以後学寮において指導者としての道を歩む。特に因明学を生涯探究し、明治四十三年（一九一〇）二月十四日に八十歳で入寂した。^③

安政五年日米修好通商条約が結ばれ、長崎・横浜・函館が開港された。翌年から長崎・横浜にアメリカ・イギリスなどのキリスト教各派の宣教師が、競うようにやってくる。幕府は、宣教師の宿泊所として寺院を提供した。宣教師は、そこを拠点に周辺住民に漢訳聖書の配布を開始した。^④文久元年（一八六一）に、学寮の責任者として樋口龍温が講師に着任する。講師樋口と副講雲英晃耀は、文久二年（一八六二）一月に横浜に建立された天主堂や、キリスト教の実情を調べに横浜に出かける。そこで多くのキリスト教を中心とした洋学書籍の収集を行った。こうした資料を基にキリスト教の研究分析が行われた。

慶応三年（一八六七）に王政復古の詔が宣せられ、翌年、鳥羽伏見の戦いで徳川軍が敗走。明治維新となる。いよいよキリスト教の、本格的な布教を目前にして、仏教を守るために、東本願寺学寮に護法場が設けられた。雲英晃耀は、明治二年（一八六九）二月九日から二十三日まで、関東東海地方の寺々を廻って、十一回の連続講説を行った。キリスト教から仏教を護るための護法の講説である。その聞き書きが『護法総論』である。内題として『破切支丹講述』という。この書について、徳重浅吉は「此の書の内容は、実に立派なものである。即ち所読の序次といひ、論述の調子といひ、さすがは因明学の大家を想はしめる。」と讃え、「護法論中の白眉」と評した。^⑤この中に雲英晃耀の基本姿勢を探る。

切支丹ノ徒類、神国ニオヒテ、昔ヨリ鼎立タル神儒仏ノ三道ヲ滅シ、終ニ我国ヲ吞唾セント欲スル。平生ハトモアレ、此治世ニ至リテハ、三道ヲ学ブモノ、兄弟ノ争ヒヲヤメテ、外切支丹ノアナドリヲフセガズンバナルベカラズ。然ルニ、人或ヒハ此切支丹ノ宗ハ、佛法ノ害タルコトヲ知ツテ、神儒二道ノ害タルコトヲ知ラズ。或ヒハ、神儒仏ノ三道ノ害タルコトヲ知ルト云ヘドモ、終ニ国家ノ大害ヲ招引スルコトヲ知ラズ。⁽⁶⁾

切支丹は、昔から、神儒仏の三道を滅ぼして、我が国を飲み込もうと思っている。今まで神儒仏は争っていたが、現在はその兄弟争いを止めて、外国からやってくる切支丹を防がねばならない。仏教への被害だけではなく、神儒への被害もあり、ついには国家の大害を招くことになる。冒頭で警告を発している。

対策として、明治元年（一九六八）八月八日に、浄土真宗は護法場を開くが、その目的を次のように説明する。

此護法場ハ、別シテハ浄土真宗御一派ノ法城ヲ守リ、惣ジテハ八宗九宗ハ勿論、儒道・神道迄護持シテ、皈スル処勤王ノ為也、報国ノ為也。我等ハカ、ルトキニ、又ヲニギルコトモ出来ズ、法ヲ発スルコトモ出来ズ、然リ、勤王報国ノ為ニ、民ヲ教導シテ、国民ヲ感戴シテ、御国禁ノ宗ヲ失ハシメ、神儒仏ノ三教ノ正タル処ヲ兼用スベキコトナリ。今正シク正法護持ノタメニ、暫ク十門分別⁽⁷⁾。

護法場は、浄土真宗の法城を守るためのものであり、仏教の八宗九宗は勿論、儒道・神道までも護持し、勤皇報国のためとする。また護法の理論について、国禁の基督教の本質、正法護持の理論を、十に分別して講説している。

第一から第四は、基督教伝来の歴史を詳しく語り、第五において、その思想的本質を、唯識論に登場する外道、大自在天外道と同じであると断じる。そして第六から第九では、基督教の思想的分析がなされ、第九の「問答異同」では、問答の形式で仏教とキリスト教の教えは「同一ニ似タリ。イカン。」という形で、その異同を論じて説得力がある。十問の内、浄土真宗の思想的比較なども注目される。そして最後の第十において、今までの分析を通じて、

キリスト教思想の根幹は、やはり「九十五種ノ外道ノ中デハ、大自在天等ノ事天外道」であるとし、「故ニ世親論主「唯識論」ニ大自在天外道ヲ破シ玉フ処ノ能破ニ順ジテ、七ケノ量ヲ立テテ彼邪道ニ止メヲサスベシ」とする。すなわち、キリスト教の思想を、大自在天外道を論破した世親の「唯識論」に順じた論法で、止めを刺すというのである。そして最後に「如レ此因明論道ヲ以テ、立量シテ難ゼバ、百ヤソ出ルト云ヘドモ、恐ラク舌ヲ尽シテヤミヌベシ。」という。因明の論法によって、論難すれば、百のキリスト教の宗派が来ても、論破できるとしているのである。

こうした緊迫した護国と護法の姿勢の中で、キリスト教論破の根幹に「唯識論」と「因明学」を置くのが雲英晃耀の維新期の基本的仏教姿勢である。

この後、仏教界は廃仏毀釈・神道国教化に見舞われる。雲英晃耀の安休寺は、三河の真宗地盤にあり、明治四年（一八七二）三月には、護法一揆が起るなど、周辺の信仰的動揺は大きく揺らぎ、数年間は民心の安定は得られなかった。また政府は、明治五年（一八七二）神道国教化の教義布教を行わせるために教部省を設け、その管轄下に教導職を設け、神官・僧侶を総動員し、天皇を神とする教義の教導を行わせ、僧侶の自由な布教は禁じられた。しかし国民教化は進まず、明治十年（一八七七）に、教部省は廃止される。

こうした思想的な混乱の中で、世の中はまさに西欧の文物によって維新されてゆく。その中で、新たな思想が芽生えてゆく。

三 明治初期の論議言説―演説・議論から論理学へ―

近現代の日本の歴史の中で、議論することの重大性が主張された時代がある。それが明治初頭であり、その目指

すべき道を示したのは福沢諭吉である。

明治四年（一八七一）福沢諭吉は、『学問のすすめ』初編を十二月に執筆し、翌五年二月に出版する。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり。」と高らかに天賦人權の自由と平等を宣言し、続けて「人間普通日用に近き実学」を学問とし、最も進んだ実学を洋学とし、この学問の力によって「身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきなり」と主張する。そして「学問をするには分限を知ること肝要なり。」とし、国民の分限を次のように語る。

徒に政府の威光を張り人を畏して人の自由を妨げんとする卑怯なる仕方にて、実なき虚威というものなり。今日に至りては最早全日本国内にかかる浅ましき制度風俗は絶えてなき筈なれば、人々安心いたし、かりそめにも政府に対して不平を抱くことあらば、これを包みかくして暗に上を怨むることなく、その路を求めその筋に由り、静かにこれを訴えて遠慮なく議論すべし。天理人情にさえ叶う事ならば、一命を刎て争うべきなり。これ即ち一国人民たる者の分限と申すものなり。^⑨

封建的な威光によって、人の自由独立を妨げるのは、卑怯であり、実なき虚威であり、「最早全日本国内にかかる浅ましき制度風俗は絶えてなき筈」である。したがって不平があれば、「静かにこれを訴えて遠慮なく議論すべし。」という。

そしてこの議論できる力を、さらに発展させたものが、『学問のすすめ』十二編の「演説の法を勧むるの説」である。こうした福沢の演説・議論を広めんとする意欲は、旺盛であり、それが明六社で認められ、知識人に広がり、新聞雑誌で取り上げられ、明治四年創設の郵便制度等で地方にまで広がってゆく。

こうした演説と議論の広がりの中で、その演説や議論の技法への関心が高まる。福沢たち三田演説会の技術的な

研究に関して、須田は「先づ寄席へ行つて講談を聞く、落語を聞く、或は「エロキューション」とか「ジエスチユア」とかいふやうな原書を読み、なるべく人の聴かない虚で練習をやらうといふので、或時の如きは金杉橋から屋根舟を仕立て、隅田川を遡つて両国橋の下に舟を繋いで、盛に討論演説の稽古をした」と語っている¹⁰⁾。こうした練習は明治六年（一八七三）頃であり、明治七年に福沢は、演説と議論の進め方を会議として記した『会議弁』を發刊し、三田演説会を始めるとともに、明六社においても演説・議論（＝會議）を勧めてゆく。明六社でそれが認められ、広まつてゆく。翌八年に福沢は洋風の三田演説館を建設する。後に日本最初の演説館として、国の重要文化財に指定される。明治九年には、演説館周辺に、尾崎行雄らが組織した協議社や猶興社・自由社などの結社ができ、演説会・討論会・新聞投稿などを活発に行うようになる¹¹⁾。

協議社において演説の花形として活躍し、後に憲政の神様といわれた尾崎行雄が明治一〇年に翻訳し、発表した『公開演説法』は、『會議弁』が演説や討論の順序次第の解説であるのに対し、「達弁之起源」から「聲音之部」「句ヲ切り并意ヲ強フスル事」「主意并ニ之ヲ言フ可キ法」「身振りノ言語」「演説ノ際身持之心得」「音声ヲ正調ニ維持スル法」などの項目を立て、演説・議論での弁論の技術を具体的に解説し、最後に、その「弁舌ヲ研磨シ」国会・裁判所の議論において發揮しようと呼びかけている¹²⁾。

明治七年（一八七四）に板垣退助が「民選議院設立建白書」を政府に提出した。国民が選んだ議員による院会、即ち国会開設の要求は、政府の時期尚早論によって抑え込まれ、板垣は土佐に立志社を結成し、国会開設要求を地方から興していくための運動を開始する。そして各地方に呼びかけ、各地に民権運動が広がり、やがて自由党を結成する。こうした国会開設要求の中で、演説・弁論は全国に広がってゆく。明治十四年（一八八一）には、大隈重信が憲法制定と国会開設の早期実現を要求するが、時期尚早とする伊藤博文によって下野することとなり、立憲改

進党を結成する。

こうした中で、国会開設の詔が発せられ、演説・弁論は、国会開設（明治二十三年）・憲法制定（明治二十二年）を目標として、更にその技法が深められてゆく。この時期の演説・弁論の技法に関する著書を列挙する。

- ・明治一〇年（一八七八）尾崎行雄著『公開演説法』
- ・明治十二年（一八七九）栗原亮一訳・チャールス・ベル著『泰西名家演説集 附・演説法』
- ・明治十三年（一八八〇）高良二訳・ヒュー・ブレイル著『泰西論弁学要訣』
- ・明治十四年（一八八一）松村操編『演説金針』
- ・明治十五年（一八八二）小笠原美治著『結社演説政談方針』⁽¹³⁾
- ・明治十八年（一八八五）馬場辰猪著『雄弁法』
- ・明治二十年（一八八九）伊東洋二郎著『實用演説法 雄弁秘訣』
- ・明治二十二年（一八八九）吉岡平助著『会場秘訣議員弁論法』

このように、国会開設・憲法制定に向けて、演説・弁論技法に関する著書が次々と出版される。⁽¹⁴⁾

演説・弁論の技法だけでなく、その根本を探ろうとする動きも現れる。西周は明治七年（一八七四）『明六雑誌』に「知説五」を発表し、この中で「論議体ハ理性（リーゾン）ニ根拠シ、文学ノ潤色ヲ仮ルト雖モ、其實〔ロジック（致知学）ニ淵源スル者ナリ〕と言っている。⁽¹⁵⁾ すなわち論議は、理性を根拠にするが、その実質はロジックであるというのである。また同年『致知啓蒙』という我が国最初の論理学書を発表し、⁽¹⁶⁾ その中で、亜立斯度徳（アリストテレス）を「ロジカノ父」とし、その歴史を述べた。⁽¹⁷⁾ そして明治十年（一八七七）六月十七日東京大学第三講義室で、西周が行った「演説会の説」という演説では、中国・日本の政治の中には演説はなく、学問は目で学ぶも

ので、高吟するのは詩文であつた。「然ルニ維新ノ際ヨリ天下ノ學問豹變シ、事率ネ西欧ノ輸入ヲ仰グノ時ニ至リ、福沢氏ナル者イデテ、此演説会ヲ以テ前時ノ詩会ニ引替ヘラレタリ」とし、最後に学生に向かつて、

故ニ此校ニシテ此説設ケアルハ、僕ノ学生諸君ニ深ク望ム所ニシテ、諸君翼ハクハ各自所業ノ科学ヲ以テ本体ノ血肉トシ、之ヲ貫クニ致知學（ロジック）ノ骨格ヲ以テシ、而テ之ガ文彩粧飾ヲナスニ文章學（レトリック）ノ被服ヲ以テシ、此上陸続トシテ茲ニ勉強アラントヲ。⁽¹⁸⁾

西周は、演説の根幹に、致知學（ロジック）を置き、科学を血肉とし、文章學を被服としてゐる。このように論議・演説の根幹は、アリストテレスを源流とする論理學（致知學・ロジック）となつたのである。⁽¹⁹⁾

同一年、後に「憲政の神様」と言われた尾崎行雄も『公開演説法』の冒頭で、「吾輩熟々世上ノ形成ヲ察スルニ演説ノ事タルヤ、今後益々盛大ニ至ルモ衰退スルノ理ナシ。先ズ其一二ヲ云ハハ国会起ラハ茲ニ演説セサル可カラス、審判法設ケラルレハ可セサル可カラス、」と述べ、後半では、演説して大益となる場所が三か所、寺院・裁判所・議事院であるが、學者は寺院ではなく裁判所か議事院でその弁を發揮すべきだとし、最後に

弁舌ヲ研磨シテ陪審、国会ノ設立ヲ待チ、其時ニ至リテ大ニ通弁ノ功ヲ現ハシ、大ニシテハ此民ノ幸福安寧ヲ保護シ、米ヲ凌クノ盛域ニ達セシメ、小ニシテハ其名聲ヲ全国ニ轟カシ、芳香ヲ千秋ニ伝フ可シ。豈ニ亦愉快ナラスヤ。⁽²⁰⁾

と締めくくつてゐる。まさに尾崎は、演説・議論を国会・裁判所において發揮しようと呼びかける。更に明治十五年（一八八二）に論理學書『演繹推理學』を著す。ここでは「漠然タル言語文章ヲ以テ漠然タル議論ヲ發露スル」のを改め、「碩儒アリストートル」以後の論理學により「思想ニ法アリ言語ニ則アリ議論ニ格アルヲ示」し、日本人の「權利、自由、民權、國權、主權」などの議論の深化が主張される。これは国会開設・憲法制定への議論の深化を目指

したものである。福沢の主張した演説・議論は国会や法廷で実用されるものとされ、その根底に論理学があると考えたのである。

論理学の元祖とされたアリストテレスは、『弁論術』において、議論の前提となる演説・弁論を（１）審議、（２）訴訟、（３）演示の三種に分類定義した。それは議會と法廷と劇場において行われるという。⁽²¹⁾ また尾崎は、演説の場として、（１）議事院（２）裁判所、（３）寺院を挙げた。明治の演説・論議の追求は、論理学を根幹に置きながら、アリストテレスの弁論三種や尾崎の演説三場の（１）と（２）によって、国会開設・憲法制定を目指したのである。こうして論理学は世の注目を集めてゆくのである。

この時期の論理学関係の翻訳・出版は次のごとくである。

- ・明治七年（一八七四）西周著『致知啓蒙』
- ・明治十一年（一八七八）ブーヴィエール著、元老院刊『法律格言』〔論理学規則〕
- ・明治十二年（一八七九）スタンレー・ゼボン著、戸田欽堂訳『論事矩』
- ・明治十二年（一八七九）ウイリアム・タムソン著、文部省刊『思想之法』
- ・明治十五年（一八八二）尾崎行雄著『演繹推理学』
- ・明治十五年（一八八二）スタンレー・ゼボン著、菊池大麓訳『論理略説』
- ・明治十六年（一八八三）スタンレー・ゼボン著、桑田親五訳『論理説約』
- ・明治十六年（一八八三）清野勉著『格致哲学緒論』
- ・明治十六年（一八八三）スタンレー・ゼボン著、添田寿一訳『論理新編』
- ・明治十六年（一八八三）アレキサンドル・ペイン著、森田隆智訳『政治論理法』

・明治十九年（一八八六）スタンレー・ゼボン著、戸田欽堂訳『惹穩氏論理学』

・明治二十年（一八八八）ポウエトリ著、佐久間剛三訳『論理原論』

・明治二十年（一八八九）清野勉著『帰納法論理学』

明治十一年（一九八七）ブーヴィエル著の『法律格言』が、翻訳出版されるが、これは政府の立法機関である元老院が、法律の重要な規則を格言という形で、翻訳し並べたものである。その「基礎となる可き法律の原則」の前に、「論理学の規則」の章を置き、法律の前提に論理学の規則の理解が必要であることを示している。明治十二年（一八七九）にはスタンレー・ゼボン『論事矩』が戸田欽堂によって訳されている。スタンレー・ゼボンは、イギリスの論理学者ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズで、西が依拠したジョン・スチュアート・ミルの論理学を循環論と批判して登場した、当時最新の論理学者である。⁽²³⁾そして次々とゼボンの論理学が翻訳される。明治十年代に西洋論理学といえばゼボンの論理学で代表されていたのである。明治十二年、文部省からウィリアム・タムソン著の『思想之法』という論理学の大著が翻訳される。この冒頭の例言において、ロジックは「思想・論弁ノ定法ヲ講明スルノ学ナリ」とし、その名称を「論説学」と訳すとし、「論理学」や「致知学」よりも、論弁・論議重視の姿勢を示している。国会開設・憲法制定を目指して『公開演説法』を訳した尾崎行雄が、明治十五年（一八八二）に『演繹推理学』を書く。序において、「人民未タ権理自由民権国権主権等ノ何者タルヲ知ラズ」とし、その原因は、邦人の議論が粗雑であることに一因を求め、この論理学書を書き、「思想ニ法アリ言語ニ則アリ議論ニ格アルヲ示シ初学ノ徒ニ授ク」としている。

このように西によって思考の学とされたロジックが、法律の基礎とされ、論弁論議に必要な学とされてゆくのは、明治二十二年（一八八九）帝国憲法制定・明治二十三年（一八九〇）国会開設に向けての世論の高揚によるのであ

「諸君よ国会開設の盛運將に近きにあり。此の際論理の法を講じ、満腔の高議を提起して、国家に報ゆる所あれ。本書は該く論理の秘密を明晰に解説し、實際に適用せる者にて、苟も有為諸君須用の書たり。」と、国会開設に向けて、論議を提起し、国家に報いるために必要な書であると宣伝する。スタンレー・ゼボン（ジェボンス）の論理学は、数学との結合を認めないJ・S・ミルの論理学を批判し、論理学を数学の基礎の上に置き、統計学を駆使して、科学的に分析する方向に向かう。更にそれを経済学に応用し、経済を基本とした政策論や立法に活用したと評価されている。⁽²⁵⁾ ジェヴォンズの政策論に関しては、明治十年（一八七七）に山辺丈夫など七名がロンドン大学で直接講義を受け、山辺は十二年に帰国し、渋沢栄一発起の我が国最初の工場制工業大阪紡績工場を設立する。⁽²⁶⁾ 明治十五年（一八八二）には、安田源次郎がジェヴォンズの『ゼ氏経済論』を翻訳し、翌十六年には文部省編輯局のジェヴォンズ『貨幣説』の翻訳などが続く。⁽²⁷⁾ これらによるとジェヴォンズは、論理学の実学的応用として経済学や財政政策があることを示している。

明治初期の論議言説の高揚は、その根底に西欧論理学を発掘し、論理学は、ミルからジェヴォンズに移り、更にジェヴォンズ経済学書翻訳に至る展開は、論理学の実用を目指していたのである。

四 論理学と雲英晃耀の因明研究

こうして西欧の論理学が注目され、次々と出版がなされる状況に対して、仏教の論理学である因明の大家である雲英晃耀が猛然と、議論を挑んでゆく。雲英は因明書の出版・講演・学会活動など活発に行う。その結果、因明に関する論者も現れ、因明研究も活性化してゆく。こうした因明の研究の中で、仏教の論義史の発掘が行われている

のである。

雲英晃耀は、先に検討したように、開国によるキリスト教の布教から国と仏法を護る姿勢を持つて、明治二年（一八六九）に『護法総論』を著した。その根幹に「唯識論」と「因明学」を置いていた。その因明学を、西欧の論理学に対抗する形で、思考を深め、次々と因明学の著作を発表するのである。それを列挙してみる。

明治十二年（一八七九）『因明正理門論科図』

明治十四年（一八八二）『因明入正理論疏方隅録』四月十三日から全十三卷。発刊終了十二月三十日。

明治十四年（一八八二）『因明大疏』四月二十八日から全三卷。

明治十四年（一八八二）『因明三十三過方隅録』四月三十日上下二卷。

明治十四年（一八八二）『因明入正理論疏 冠註』五月から十一月、上中下三卷。

明治十四年（一八八二）『因明初歩』十月十九日。

明治十四年（一八八二）『因明大意』十月十九日。

明治十七年（一八八四）『因明活眼』

明治十八年（一八八五）『因明正理門論科本』

明治十八年（一八八五）『因明三十三過本作法講義』

明治二十二年（一八八九）『東洋新新因明發揮』

明治二十三年（一八九〇）『因明協会報告』

この時期は、先に示した「ロジック」即ち「論理学」が、明治二十二年（一八八九）の帝国憲法制定・明治二十三年国会開設に向けて注目され、翻訳や出版が相次いだ時期に重なっている。そこでこれらの著作の中で、「論理学」

がどのように意識されていたかを検討する。

明治十四年（一八八二）に書かれた『因明初歩』は、冒頭「因明ト云フハ、何ナル法ナリヤ。答フ、因明ハ印度ノ議論法ナリ。此ノ法ニ由リテ議論ヲスレバ一切道理アル論ニ、負ケル氣遣ハナイ。」と始まる。因明は議論法であるとし、その論法と例証を挙げてゆく。その中の例証として、「仏者ガ耶蘇ヲ相手トシテ過去世ハ実ニ有ナルベシノ宗ニ比例シテ知ル所ナルガ故ニ、因ヲ立ツルガ如シ。耶蘇ハ現末二世ヲ立ツレドモ、過去世ト云フコトヲ立テズ。」というものがある。確かに仏教では、過去世が実際にあるものとして考えられているが、キリスト教では個人の過去世はない。あるのは現世と未来だけである。これは『護法総論』の第九「問答異同」の延長である。すなわち『因明初歩』は、明治二年頃の護法の姿勢を引き継いでいるのである。しかしキリスト教は、危険視するほどの広がりを見せず、破邪の姿勢は消えてゆく。^③

同年の『因明大意』では、冒頭に「宗因喩三支作法図」と、「西洋ロジック第一例図」が対比されて配置されている。冒頭から、因明は東洋のロジックであると宣言しているのである。そして「因明トハ何ゾヤ。云ク印度ノ法タルヤ、論者ガ論壇ニ登リテ、巧ニ他ノ論者ノ宗義ヲ碎破シ、自己ノ宗義ヲ成立シ、自悟々他ノ両益ヲ得ル貴重ノ法ニシテ議論者ノ金科玉条ナリ」と、述べている。続けて、東洋のロジックである、因明の伝来と、その歴史を述べる。

孝徳帝白雉四年（六四八）に道昭が入唐して、玄奘三蔵より相承して本朝に因明を伝来した。延喜十四年（九一四）醍醐帝が目録を作らせ、延長四年（九二六）には、碩徳の学師に篆文を訂正させ、是非を考こう覈せしめた。また左府頼長が久寿二年（一一五五）の冬から保元元年（一一五六）まで、蔵俊僧正を師として因明を学んだという歴史を記し、最後に「古ノ帝王・大臣率テ之ヲ講学シ、之ヲ貴重スル如レ此。当時因明ノ法ノ盛ニ行ハル、亦以テ徴スルニ足レリ」と昔の天皇や大臣が、論議の学である因明を尊重し、講究していると述べている。

そして因明の三支立量とロジックの三段論法の比較をしている。

彼ノ西洋ノロジックハ、何ナル者ハ何ナリ。何ハ何ナル者ナリ。故ニ何ハ何ナリと三段ニ言ヲ掲グ。之ヲ因明ノ宗・因・喩ニ比較スルニ、タダ宗・因ノ二ノミヲ論ジテ、喩ノ一ハ論及セズ。³¹⁾

西洋のロジックは、三段に分けただけで、中身は因明の宗と因の二要素だけであり、喩の要素がないと、その違いを指摘している。この時期に論理学翻訳書で三段論法を強く打ち出したのは戸田欽堂訳ジェヴォンズ（セボン）著『論事矩』（明治十二年）であり、雲英は、これを読んだ可能性が大きい。³²⁾更に

ロジック家ガ論スルトコロ、因ヲ先ニシテ宗ヲ後ニスル、往々如此。吾ガ因明法ハ則チ然ラズ、第一ニ宗ヲ挙グ。是レ自己ノ愛樂シテ成立サントスル宗義ヲ挙ゲン為ナリ。³³⁾

と、宗と因の順序の違いに言及し、ロジックの順序は「自己ノ愛樂」、即ち自分の思考への執着とし、

因明ヨリ之ヲ觀レバ独リ自ラ真理ヲ究ムルノ法ニシテ、順自違他シテ、他ノ論者ニ対シテ自己ガ宗義ヲ主張シ成立スル論議ノ法ニ非ザレバ窮理術トハ云フベシ、論理術トハ云フベカラズ。故ニ他ノ論者ヲシテ自己ノ宗義ヲ了解セシムル為ノ比喻ヲ用ユルニハ及バズ、是レ全ク自悟ノ法ニシテ悟他ノ法ニ非ズ。畢竟窮理術ニシテ論理術ニ非ザルナリ。今我ガ法ハ則チ純真ノ論理術ニシテ自悟々他ノ二益ヲ備具スレバ、必ズ比喻ヲ挙ザルヲ得ズ。³⁴⁾

ロジックは、因明から見れば、順序においても、自己だけの真理を究める法であり、他の論者に自分の宗義を了解させるためには比喻が必要であるが、それを用いないのは、全く自分だけが悟れば良いという法であって、他を了解させる方法ではない。したがってロジックは、窮理術なのであって、論理術ではない。論理術というべきではない。それに対して、因明は「純真ノ論理術」であって、自分の了解と他人の了解という二つ益を備具していると主

張し。最後に、ロジックは「莠ノ如シ」と揶揄する。莠は、イネ科のエノコログサを指し、似て非なるものであつて、他を益するものではないと批判したのである。

後半は、因明の例証として、詳しく論じているのが次の問題である。

我が大日本ハ独立ノ帝国ナリ。世界万国之ヲ拒ム者ナシ。然ルニ聞ク所ニ據レバ、我が日本人民ガ彼ノ英仏各國ニ在テ、其ノ国律ヲ犯ゼバ、其ノ国律ニ倨リテ処置スベキ権限ヲ有セリト雖モ、彼ノ英仏各國ノ人民ガ我が日本ニ在リテ其ノ国律ヲ犯ストキハ日本ノ国律ヲ以テ処置スル権限ヲ有セズ、唯護送シテ、其ノ国ノ領事ニ引
(36)
キ渡スノミ。

徳川幕府が締結した諸外国の和親条約は、国力の無力さの証である領事裁判権や国家収益を悪化させる関税自主権など、極めて不平等である。新政府がこれを問題とし、当時、何度も交渉を繰り返してもいた大問題であつた。⁽³⁶⁾ これを取り上げて、因明の論理によって論証しようという試みである。政治性を意識した因明の論理力を主張する内容である。明治十七年（一八八四）の『因明活眼』は、更にこうした方向を鮮明にしている。

凡ソ論理ノ要ハ、論者ガ論壇ニ登リ、違レ他順レ自シテ己ガ持論ヲ貫徹スルニ在リ。而モ持論ヲ貫徹セント欲スルニ方法アリ。方法トハ何ゾ。曰ク因明法是ナリ。（中略）設ヒ政府・裁判所・稠人・広坐ノ所ニ於テモ、言論敦肅・義氣勇猛ニシテ意ニ於テ畏レ言ニ於テ屈スル所ノ無く、条理明白、簡ニシテ義通ジ、語少クシテ意貫ク、論理ニ於テ實ニ一大妙術ト謂ルベシ。⁽³⁷⁾

冒頭で因明の論理力を主張し、場面を論壇とする。その論壇とは、政治・裁判における論壇であり、衆人の前や列座の前においても、因明の法によれば、肅々と攻め、意義、気力勇猛となり、心に恐れはなく、言語においても屈するところなく、条理明白、簡にして義通じ、語少くして意を貫く、論理において一大妙術と云えるとしている。

雲英晃耀は、『因明初歩』においては護法思想を残しつつ因明の論議力を主張していたが、『因明大意』から『因明活眼』へとその政治的姿勢を増し、その論議力の政治的意義を主張する方向に展開している。これはこの時期に始めた雲英晃耀の活動と関係がある。それは「東洋因明学協会」設立と、その活動に関係する。雲英晃耀は『因明学協会報告』を明治二十三年（一八九〇）に出版している。それによって雲英晃耀の活動を検討する。

明治十年（一八七七） 自院安休寺 『因明三十三過本作法』を講じる

明治十四年（一八八二） 広島控訴裁判所所長の発起にて『因明大意』を数十名に講じる。

明治十六年（一八八三） 京都府知事の賛成により『因明大意』を数十名に講じる。

明治十七年（一八八四） 名古屋区役所議事堂にて『因明大意』を、武官、県官、法官数百名に講じる。

同年五月 帝国大学講義室にて『因明三十三過』を西村文部書記官以下数十名に講じる。

同年五月 加藤大学総理の依頼で、帝国大学大講堂にて『因明大意』を、三百余名に講じる

同年六月 大隈重信の賛成で、東京専門学校にて『因明大意』を、全校教員生徒一般に講じる。

明治十八年（一八八五） 司法省大講堂にて『因明大意』を、司法卿以下各府県の裁判長の三百余名に講じる

同年七月 元老院議長の賛成で華族会館にて『因明大意』を、元老院議員数十名に講じる。

同年十月 名古屋区役所議事堂にて『因明大意』を、議長、次官、裁判所長、郡区長に講じる。

明治十九年（一八八六） 三重県令の企画で、四天王寺にて『因明大意』を、五百余名に講じる。

同年五月 岐阜県令の賛成で、県議事堂にて『因明大意』を、講じる。

同年十一月 京都裁判所長発起で、裁判所内にて『因明三十三過』を講じる。

同年同月 滋賀県知事発起で、商工会議所にて『因明大意』を、県官法官議員数百名に講じる。

明治二十年（一八八七）大阪控訴院長の催しで、『因明大意』を、県官法官代言人四百余名に講じる。

同年三月 大阪関西法律学校にて、『因明九句因』を、教員生徒一般に講じる。

同年同月 兵庫県県会議員の発起で、兵庫小学校にて、『因明大意』を、数百人に講じる。

同年六月 静岡県裁判所長の発起で、宝台院本堂『因明入正理論』を、県官法官各宗僧侶数百人に講じる。

明治二十一年（一八八八）秋田県知事、裁判長の催で、秋田倶楽部にて、『因明大意』を講じる。

同年九月 山形県光明寺にて、『因明三十三過本作法』を、山形県裁判所長他百五十余名に講じる。

明治二十二年（一八八九）愛知県中島郡長発起、役所内議事堂で『因明三十三過本作法』を百余名に講じる。

明治二十三年（一八九〇）愛媛県松山市公会堂にて因明大演説、知事書記官等五百余名参加。

同年四月 島根県師範学校にて、因明を講ず・県知事師範学校中学校小學校生徒五百余名参加。

七月五日～二十日 『因明三十三過本作法』を講ず。福井県知事書記官裁判所長検事陸軍少佐など参加。³⁸⁾

これ以外に、寺院で主催し、僧侶が参加する講演は、この数倍に及んでいる。その活動は、極めて活発で全国に及び、その聴衆は政治家・議員・裁判官・司法関係が多い。これはこれらの人々が、明治二十二年の憲法制定や明治二十三年の国会開設に向けて、論議力を鍛える必要があり、雲英晃耀が『因明大意』などで、それに応えたからである。ロジックに関する西洋論理学の翻訳出版が、憲法制定や国会開設に向けて、次々となされたのに、対抗して東洋の論理学因明の研究者雲英晃耀も活発に活動したのである。

五 雲英晃耀と論議史の研究

明治十七年（一八四四）の『因明活眼』が、政治家や司法関係の人々に、その論議力を提供しようとする姿勢を明確に示していることは、先に述べたが、この中で日本における論議史についても検討している事に注目したい。『因明活眼』は、上下二巻十二章からなり、その第二章「因明治革」で、因明の歴史について述べている。前半で、印度・中国における因明の歴史について述べ、後半に日本の因明の歴史について検討している。

まず伝来は、四伝があるとする。第一伝は白雉四年（六五三）の道昭。第二伝は斉明帝四年（六五八）の智通・智達。第三伝は、大宝三年（七〇三）の智鳳・智鸞・智雄。第四伝は、靈龜二年（七一六）の玄昉とする。その後、四伝は道昭派の南寺伝と玄昉派の北寺伝の二派を区別する。このころからの雲英晃耀の因明史の叙述に注目する。

人王六十世醍醐帝、延喜ノ頃、主上モ因明ヲ好ミ給ヘバ、殿中ノ論筵ニ、互ニ因明ノ規則ニテ論議ヲセシコトアリト。サスレバ慈恵大師ノ時分ニハ、因明大流行ニテ、恵心僧都ハ俱舎・因明ハ此ノ土ニ究ムト申サレシ程ニテ、各宗ニ名高キ因明者アリ。宇治左大臣頼長公モ因明ノ達人ナル故ニ、何寺相承ニ載ス。又タ聞ク、輓近、聴訟ニ名高キ大岡越前守モ此ノ法ヲ学ビテ 裁判ヲナス。依テ其ノ裁判、明決一モ理ニ契ハザルハナシト。意フニ亦因明活用ノ実効ナリ。近來各宗ニ於テ、長老碩徳、日ヲ追フテ此ノ学ヲ講究セラレ、加フルニ会議ノ盛ナル時勢ナレバ、数年ヲ経ズシテ、此ノ学大ニ流行スルニ至ラン歟。是レ我ガ予期企望スル所ナリ。³⁹

単なる仏教の因明学史的説明の域を越えて、因明を活用した論議を叙述しようとしている。まず醍醐帝が因明を好み、論議するための論筵（論議場）を宮中に設け、因明の規則に従って、論議をさせたことがあった。それが延喜の頃（九

〇一）である。そうしたことによって慈恵大師（九一二〜九八五）の頃には、因明論議は大流行した。また恵心僧都源信は俱舎・因明において、その道を究めたという。また各宗ともに有名な因明者が生まれた。宇治の左大臣頼長も、因明の達人であるとして南寺相承に載っていると歴史を説明している。これは、因明学史的解説から外れて論議史的な説明である。天皇が論議の活性化を促し、大臣が論議の核となる因明の研究をし、それを支えたというのである。因明学を支え、発展させた因明学者に関しては、「各宗二名高キ因明者アリ。」とあるのみである。語っているのは、「因明ノ規則ニテ論議」する風潮の広がりである。その影響は輓近に及び、裁判官として有名な、大岡越前守も因明を学び、裁判を行った。そのことによって裁判は明決であり、一つも理に契わないことはなかったという。これが「因明活用ノ実効」であるという。即ち因明は国家運営の論議や裁判に実際的効果があると主張しているのである。

「近來各宗ニ於テ、長老碩徳、日ヲ追フテ此ノ学ヲ講究セラレ、」とあるが、先に検討した『因明学協会報告』には、全国の各地の政治家・司法関係者・各宗派の僧たちの前で、積極的に因明の講説を行っている。「加フルニ会議ノ盛ナル時勢ナレバ」とあるが、時代の趨勢が、憲法制定、国会開設に向けて、会議が盛んになり、その会議の論議の場における「因明活用ノ実効」が更に要請される時勢であることを見据えて、この文章を書いている。この『因明活眼』が書かれたのは、明治十七年であり、憲法制定まで五年、国会開設まで六年である。

『因明学協会報告』に記録された講説回数を見ると次のようである

回数説講	
年度	件数
10 年	3
11 年	2
12 年	0
13 年	0
14 年	1
15 年	1
16 年	11
17 年	21
18 年	10
19 年	11
20 年	17
21 年	10
22 年	7
23 年	18

この『因明活眼』を出版した十七年が、最も多く二十一件に達している。しかも一回の講説が、五日から十日という連続講説であることも多く、「因明活用ノ実効」の訴えが、各宗派・政界・司法界にも受け入れられつつあることを実感しつつ、「此ノ学大ニ流行スルニ至ラン歟。是レ我が予期企望スル所ナリ。」と、因明学という実効ある論議術の大流行を予期し、企画し望み、この章を結んでいる。

雲英晃耀は、この章を「因明沿革」としているが、因明の四伝二派の我が国の因明史を、因明学の展開として説明していない。そこに挙げられた人物は、醍醐帝・慈恵大師・恵心僧都・左大臣頼長・大岡越前であるが、一人も因明学者はいない。醍醐帝は「因明ヲ好ミ」であつて、力点は宮中に論議の場を設置し、論議を広めたことである。慈恵大師も、因明学者ではなく、南都中心の論議を、天台と京の都に広めた人物である。恵心僧都は因明にも通じていたが、『往生要集』で名高い浄土信仰を広めた僧である。因明学史を説明しない姿勢は、「各宗二名高キ因明者アリ。」で極まる。この各宗の名高き因明者こそ列挙説明すれば、因明学史となるのだが、それをしないのは、因明を基本においた論議の広がりこそが、説明したい核心だからである。続いて挙げられる、左大臣頼長と大岡越前の因明活用は、政治と司法における因明を活用した論議の実例であり、因明を基礎にした論議史を示す最大の狙いがある。中世の頼長から、近世の大岡越前を経て、今現在の「会議ノ盛ナル時勢」に立ち、「因明活用ノ実効」ある論議をすべきであると主張しているのである。まさに雲英晃耀の「因明沿革」の章は、因明史ではなく、教義史でもなく、論議史なのである。

雲英晃耀は、『因明学協会報告』に、「雑録（諸疏拔書）」という章を設け、諸本の因明関連の抜書きをしている。歴史書・説話集などから、ここに登場する人物醍醐帝・慈恵大師・左大臣頼長を中心に史料を抜書きしたものである。その中に、浄瑠璃や歌舞伎で有名な『壇浦兜軍記』の一節「阿古屋琴責」の一文が抜き書きされている。

平家の落ち武者景清の行方を、裁判によつて、遊女・阿古屋に白状を迫る一幕である。その裁判官秩父の正司畠山重忠は「公事裁判私の計ひなく」と讃えられる名代官である。しかしその詮議の厳しさに、阿古屋は「さつても厳しい殿様。四相を悟る御方とは常常噂に聞いたれど……」⁴⁰というのである。この遊女・阿古屋の言葉に、雲英晃耀は次のように注記をしている。

此ノアコヤ琴責文言中四相トアルガ、因明四相相違ノコトニテ、即チ言辭ト意内ト相違スルヲ責メツケ能ク破斥スルコトヲ得ル法ナルベシ⁴¹

阿古屋琴責の「四相」という文言は、因明の「四相相違」を略した言葉で、言辭と意味内容の相違を指摘し、論破する因明の論議法であるとの指摘をしている。すなわち遊女・阿古屋は、名裁判官重忠を「四相をさとする御方」、因明に通じた人物と評しているというのである。重忠は、阿古屋に琴を弾かせ、その心に偽りのないと判決を下すという結末である。これは「因明活用の実効」としての法廷論議の例であり、浄瑠璃という文学・演劇・劇場における論議の例である。

雲英晃耀の因明研究は、このように、因明そのものではなく、「因明活用の実効」としての論議中心であり、その歴史研究は、論議の政治や司法から、文学・芸能にまで広く因明論議が実用的に広がっていったことを追求する論議史そのものである。アリストテレスが、議論を前提とした弁論三法の場合として議會・法廷・劇場を挙げ、尾崎行雄が演説の場として国会・審判・寺院を挙げた。雲英晃耀の論議史研究は、これらをすべて射程にいられた研究であったといえる。また「因明活用の実効」の論証を重要視する姿勢は、西洋論理学の内のジェヴォンズ論理学が明治十二年に戸田欽堂『論事矩』により初訳され、イギリスでジェヴォンズに学んだ山辺丈夫以下の七名が実業界や官界で活躍。また帝国大学その他でもジェヴォンズ著書による講義が始まり、その実用性は応用経済学、金融学に

展開しながら、広がっていった。⁽⁴²⁾ 雲英晃耀はジェヴォンズの翻訳書を読み、その西欧論理学の実用的広がりに対抗するため「因明活用の実効」すなわち日本の伝統的論理学である因明も実用的に広がっていた事の証明として、日本論議史の発掘を行ったのである。

六 おわりに

雲英晃耀は、幕末から維新にかけて、積極的に幕府に、新政府に、国や仏教神道などを護るためにキリスト教の脅威を訴えた。それが明治二年の『護法総論』となる。ところが明治初頭の仏教界は、明治元年の神仏分離令によって引き起こされた廃仏毀釈の混乱や、明治四年の上知令で境内墓地以外の土地返納、明治五年の教部省設置により、僧侶は神道主義の国民教化をすることとなるなど、キリスト教の脅威以上の苦難を経て、明治十年の教部省廃止の頃から、仏教界の覚醒的動きが活発となる。そうした中で雲英晃耀も新たな仏教の提案をするのである。

明治の文明開化は、福沢諭吉の実用重視・演説・議論の提案以降、空前の演説・議論文化を生み出す。そしてその演説・議論は、憲法制定・国会開設要求となつて、燃え上がってゆく。演説・議論の技術論は、その根底にロジックを発見してゆく。そして西洋論理学書の積極的な翻訳が明治十年頃から活発となる。

こうした状況に対して、雲英晃耀は、東洋にも因明という論理学があり、その因明は、ロジックが思考の論理を重視するのに対して、論議における論理を重視するもので、優れていると主張する。そして政界・司法界に積極的広報活動を推進する。この中で、日本に因明伝来以後、論議を重視する風潮が生み出され、政界・司法界から一般庶民に至るまで、因明の論議が公平公正な論議を生み出すことを日本人が信じるようになったという日本の論議史

を發掘するのである。この因明の実用的活用としての論議こそが、雲英の新しい仏教の提案であつた。そして明治二十二年（一八八九）雲英晃耀『東洋新々因明發揮』を發表する。

東洋ニハ因明即チ鹽都費陀アリ。西洋ニハ論理即チ路日克（ロジック）アリ。蘭菊美ヲ争ヒ金玉光ヲ競フト雖モ、対照比較スルニ互ニ優劣得失アリ。因テ今ニ論法ノ長所ヲ撰取シテ、別ニ機軸ヲ出シ、新々因明ト名クル。因明とロジックを比較し、その長所を選び取つて、新々因明として發表した。

これを契機に、因明論争が起こる。明治二十二年（一八八九）六月の『哲学会雜誌』二十八号に、村上專精が「因明トろじつくノ對照」という論文を發表する。村上は、因明とロジックを比較して、ロジックは自悟的思想であるとし、思想運用の順序によるものであるが、因明は他人に説明を要する悟他的言語の規律とした。そして「此頃或ル因明学者アリテ一ノ新機軸ヲ發明スト称シ」と、名前は挙げていないものの「意ヲ解スルニ甚ダ苦シム者ナリ」と批判した。⁽⁴⁴⁾同年六月に、大西祝が『哲学会雜誌』二十八号に「因明につきて其一」・二十九号「其二」を發表。大西は、因明には古代因明と近世因明があり、古代因明は例證的論法であり、近世因明は演繹論法で、全く別種の論法であるとした。そして「其三」において雲英の因明について東西の論理法を折衷した一大新法は、「志は予輩深く嘉みせざるを得ず」と言いながら、雲英の新々因明は「因明固有の特性を棄てて西洋論理の方式に化し去らんとする者に外ならず」とし、「兜を脱いで西洋の論理学に降参せんとす。余輩豈に其衰運を嘆ぜざるを得んや」と批判した。⁽⁴⁵⁾これに対して、雲英晃耀が反論、大西祝が再反論を繰り返す。その後、村上專精は明治二十四年（一八九二）に四五頁に及ぶ『活用講述因明学全書』を出版し、因明は八大部門に分かれ、言語に属する四門と、思想に属する四門があり、言語を重んずる悟他主義論理学であるとし、西洋の帰納的研究が欠けているので、それを得れば、「完全無欠ノ論理学トナラン」と結んだ。⁽⁴⁶⁾大西祝は、明治二十四年から東京専門学校で、「論理学」を講じ、翌年には、『哲

学会雑誌」六四号に「形式的論理学ノ三段論法、因明ノ三支作法並弥兒ノ帰納則ヲ論ズ」を発表し、ミルの論理学と因明を通して「新しき論理学の研究に入る」宣言をし、研究を進展させた。明治三十三年（一九〇〇）に三十六歳の若さで没し、その遺稿として明治三十六年（一九〇三）に『論理学』が出版された。⁴⁷ またこの年、今井清吉の『因明学綱要』が発表されるなど、因明研究は活性化した。こうした因明研究の流れに關して、舟山信一は「明治論理学史において因明の研究家として大きな役割をはたしているのは雲英晃耀」とし、因明とギリシア論理学の起源問題や、論理学上の特性としての自悟・悟他の比較問題など雲英に發して以後の因明学者が継続的に検討していることを指摘した。⁴⁸ また師茂樹は「明治初期から中期にかけての因明学は、近代化という社会状況のなかで仏教という範圍を越える側面を持っていた反面、扱う文献としては『因明入正理論』と基『因明入正理論疏』に基づいていたため、ベースとなる理論としては伝統的な議論の範圍を出ないものであった」とし、「研究者のなかでの文献学、仏教思想史学として閉じていくことになり、西洋論理学や政治活動のようなものへ開かれていた性格が失われていったようである」としている。⁴⁹

雲英が重視したのは、ギリシア論理学の単なる比較や優劣ではない。雲英晃耀が願ったのは「因明活用ノ実効」である。社会にそして政界や司法における活用を広げてゆくことである。それは雲英が比較したジェヴォンズ論理学が、経済学として実業界に、財政学として官界に活用が広がってゆく現実を見て、その影響を受けつつ、論理学としての生き残りをかけた対抗姿勢として「因明活用ノ実効」を目指したと言える。雲英が日本の歴史の中に論議史を見出したのも、因明が日本の社会の中で実効ある形で活用されていたことを示すことで、因明による論議をこの明治の世に復活させんとする企望であったのである。ところが他の因明学者との論争の中で、「因明活用ノ実効」が、他の因明学者を動かすことなく、政界や法曹界での因明の実効ある活用は忘れられ、師氏の言うように、論

争は思想論争に閉じられ、論議史は忘れられてしまったのである。すなわち雲英晃耀の実用的新しい仏教の提案は、引き継がれず、終息してしまったのである。

近年の論議研究の成果は、二〇二〇年に刊行の楠淳澄編集の『日本仏教と論義』によって、その広がりを示している。この中の二十一の論考は、古代南都の論義から宗派を越えて展開した中世の論義、更に芸能・文学・社会現象との関わりまで論義研究の対象が広がって展開しつつある現状を示している。こうした広く豊かな論議の歴史的伝統を最初に発掘し提示した論議研究の先駆けとして、雲英晃耀の論議史研究があつたことを評価するとともに、現在の論義研究が教学史や教理史に閉じこもることなく、更なる論議史研究の広がりを願っている。

註

(1) 「論義」と「論議」は、共に対論を前提にするが、「論義」は義を論ずるという教義的側面を重視する表記であり、「論議」は、漢熟語に多い類似の動詞を並列配置して強調したもので、対論し、まとめる意味の動詞「論」と、対論し、分別する意味の動詞「議」の、両者の共通意味である対論する動作を強調している熟語である。従って、対論・討論という面を重視する表記と判断使用する。「論議」は、維新期に西洋的な討論形式が導入されると、「議論」と逆転使用され、広い公的な場に向かう対論を意味するようになる。この時期、漢熟語の増産期であり、多く逆転漢熟語が作られた。(竹中憲一「中国語と日本語における字順の逆転現象」『日本語学』十号、一九八八年。)

(2) 楠淳澄『日本仏教と論義』(二〇二〇年、法蔵館。)五七五頁。論義研究の広がりに関して、やはり編集後記において「論義というテーマをひろく「宗教的対話(コミュニケーション)」と捉えるならば、その射程は仏教の教理問答にとどまらず、儒教やキリスト教など諸宗教の儀礼・文献群に及ぶほか、律令や文学の講義・注釈などあらゆる対話的形式をもつ文

献群に広がるものであらう」としている。

- (3) 雲英晃耀の伝は、南條文雄撰文「因明院晃耀講師伝」『新編真宗全書史伝部四』（思文閣、一九七五年。三七八頁）に詳しく、「安休寺」については『愛知県地名 日本歴史地名大系23』『安休寺』の項。（平凡社、一九八一年）。
- (4) 「宣教師の渡来」『アジア仏教史日本編Ⅷ近代仏教』（佼成出版社、一九七二年。七九頁）
- (5) 徳重浅吉「解題 護法総論」『明治仏教全集』第八卷、護法篇。（春陽堂、一九三五年、十三頁）。徳重浅吉『維新政治宗教史研究』（目黒書店、一九三五年、三七五頁）
- (6) 雲英晃耀「護法総論」定盤大定編『明治仏教全集』第八卷、春陽堂、一九三五年、二五九頁。
- (7) 右同、二六一頁。
- (8) 雲英晃耀が住む三河は真宗地盤であり、徳川家康を窮地に追い詰めた三河一向一揆の地である。維新期にも強硬な寺院整理が行われ、それに反対した僧侶と民衆数千人が押し寄せ、菊間出張所の役人との談判中に暴徒化し、逃げ出した役人一人を殺害してしまう事件となる。いわゆる大浜騒動である。遠山佳治「大浜騒動の社会的背景」（『幕末維新論集11 幕末維新の文化』吉川弘文館、二〇〇一。初出は『岡崎市史研究』第八号、一九八六）。
- (9) 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫 一九四二年 十六頁。
- (10) 石河幹明『福沢諭吉』岩波書店、一九二五年。
- (11) 『慶応義塾百年史』上巻、慶應義塾、一九三五年。六七六頁。
- (12) 尾崎行雄『公開演説法』国立国会図書館デジタルコレクション、一八七七年。
- (13) 小笠原美治「結社演説政談方針」は、演説法に関するものではない。演説・集会の大流行に対する政府の規制を列挙・解説するもので、政府の厳しい取り締まりは、演説の自由を奪うものではなく、反動を抑えるものであるという弁明

を基本的基調としているものである。

- (14) これらは国立国会図書館デジタルコレクションで見ることができる。
- (15) 西周「知説」『西先生論集四』国立国会図書館デジタルコレクション、一八七七年。三五頁
- (16) 西周「致知啓蒙」国立国会図書館デジタルコレクション、一八七四年。七頁。
- (17) 山川偉也「西周『致知啓蒙』に見る西洋形式論理学の本邦への導入について」『総合研究所紀要』十九(三)、一九九四年。
- (18) 西周「演説会ノ説」『西周全集』第三卷、宗高書房、一九六六年。二九一頁。
- (19) 西周は、明治七年六、七月にはロジックを致知学と訳し、十一、十二月に論理学と訳した(船山信一『明治論理学史研究』理想社、一九六六年、二十頁)。この「演説会ノ説」の直後に「論理学」と訳することになる。
- (20) 注十二同。五四頁。
- (21) 『アリストテレス全集 十八卷 弁論術・詩学』岩波書店、二〇一七年。三六頁。弁論の行われる場に関しては、補注に分析がある。(3)の演示・劇場に関しては、W・リース・ロバーツの英訳(Rhetoric, Aristotle, Translated by W. Rhys Roberts)ではthe ceremonial oratory of displayとあり、儀礼的弁論とされている。またG・E・R・ロイドも「儀式での弁論」としている。(G・E・R・ロイド、川田殖訳『アリストテレスその思想の成長と構造』みすず書房、一九七三。二三八頁。)これらでは宗教的儀礼での弁論・演説を想定していると考えられる。
- (22) ブーヴィエール著『法律格言』元老院蔵、国立国会図書館デジタルコレクション、一八七八年。二四八頁。
- (23) 井上琢智『ジェヴォンズの思想と経済学・科学者から経済学者へ』(日本評論社、一九八七年)
- (24) 佐久間剛三訳、ポウエトリ著『論理原論』(国立国会図書館デジタルコレクション、一八八八年)の末尾広告。
- (25) 大田一廣・鈴木信雄・高哲男・八木紀一郎編『経済学思想史社会認識の諸類型』(名古屋大学出版会、一九九五年)

では、第一編を「経済学の古典的世界」に置き、第二編を「現代経済学の諸相」とし、その冒頭に「W・スタンレー・ジェヴォンズ「科学者から経済学者へ」を配置し、現代経済学を開いた人物として評価している。その中で、数学と論理学を基礎に、経済的政策を提言した人物と評している。

- (26) 山辺丈夫は『孤山の片影・山辺丈夫』（福音印刷、一九一三年、『人物で読む日本経済史¹³』ゆまに出版、一九九八年復刻）によると「我が工業界の父」と言われた人物である。山辺はロンドン大学でジェヴォンズに学び、その講義ノートが残されている。井上琢智（『黎明期日本の経済思想』日本評論社、二〇〇六年、一五二頁）によるとジェヴォンズ経済学の影響は純粹経済学ではなく、「応用経済学」であり、帰国後はその応用のため実業界に進み、大きな影響を与えたとした。そして阿部秀二郎（山辺丈夫のノートに関する「考察―ジェヴォンズとの関係―」では、山辺はジェヴォンズが当時格闘していた労働問題を受容し、それを企業経営に活かしたという。

- (27) スタンレー・ゼボン『経済論（ゼ）氏』（安田源次郎訳、国立国会図書館デジタルコレクション、一八八二年）において経済の根本に財貨をおき（三頁）、その性質を論理学を応用して三つに規定し（十九頁）、自分の経済学の根幹に論理学があることを表明している。

- (28) スタンリー・ジェボンス『貨幣説』（文部省編輯局、国立国会図書館デジタルコレクション、一八八三年。）の冒頭の「貨幣説例言」において「氏ハ方今ノ一家ニシテ別ニ経済書論理書等其他数部ノ著述アリ」と、論理学者・経済学者としても著名であることを記している。

- (29) 雲英晃耀『因明初歩』、国立国会図書館デジタルコレクション、一八八一年。

- (30) キリスト教を危険視する姿勢は、仏教界のみならず政府にも強くあり、それが徳川幕府の禁教政策の継続となり、浦上四番崩れのキシタンの流罪となる。その処罰を巡って、列国代表の英公使パークスの度重なる抗議の末、明治

六年に切支丹禁教高札撤去となるが、これはキリスト教布教許可ではなく、禁教処罰しない黙許である。こうした姿勢によって、キリスト教の布教は危惧する程には広がらなかった。こうした状況に関しては、鈴木裕子「明治政府のキリスト教政策 高札撤去に至る迄の政治過程」(『史学雑誌』八六(二)、一九七七)に詳しい。

(31) 雲英晃耀『因明大意』、国立国会図書館デジタルコレクション、一八八一年、三頁。

(32) 戸田欽堂訳『論事矩 上』(国立国会図書館デジタルコレクション、一八七九年)第三章において「論法ハ三段ノ命題三箇ノ語格ニテ成リ」と、例を挙げて説明している。また中巻では「十章三段論法」「十一章三段論法之規定」「十二章憶説三段論法」と三章を費やして論じている。三段論法をこれだけ費やして論じたものは他には見られない。

(33) 注31同、四頁。

(34) 注31同、五頁。

(35) 注31同、六頁。

(36) 幕府による和親条約は不平等条約であるとする説が多かったが、近年の研究では、幕府や維新初期には存在せず、新政府によって不平等条約であるとされ、その克服が重要な課題となっていたとされ、不平等要素の関しても、中国や他と比較して、不平等との断定にも疑問があるとされている。森田朋子「不平等」条約と領事裁判権 開港直後の日英交渉を中心として(『史学雑誌』一〇五・四一九八六年)。加藤祐三・川北稔『アジアと欧米世界・世界の歴史25』(中央公論社、一九九八、三五三頁)、諸洪一「近代東アジアの黎明に関する一試論 日米和親条約と日朝修好条規」(『札幌学院大学人文学会紀要』(九六)二〇一四年)。荒野泰典「近世の国際関係と「鎖国・開国」言説」『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』(十一)二〇一五年など。

(37) 雲英晃耀『因明活眼』国立国会図書館デジタルコレクション、一八八四年、一頁。

- (38) 雲英晃耀『因明学協会報告』国立国会図書館デジタルコレクション、一八九〇年、二十三頁。
- (39) 前提『因明活眼』、二十頁。
- (40) 長谷川千四「壇浦兜軍記」『浄瑠璃名作集 上』日本名著全集江戸文芸之部第六卷、日本名著全集刊行会、一九二七年、四二五頁。全五幕からなり、第三幕が「阿古屋琴責」の段として有名となり、歌舞伎ではここだけを演じている。
- (41) 雲英晃耀『因明学協会報告』国立国会図書館デジタルコレクション、一八九〇年、四十六頁。
- (42) 井上琢智「第七章ジェヴォンズ経済学の導入と展開」(『黎明期日本の経済思想』日本評論社、二〇〇六年)によると、影響は実業界官界に及び、雲英が因明講演した帝大・東京専門学校でジェヴォンズ著の講義もあった(一九六頁)。
- (43) 雲英晃耀『東洋新々因明發揮』国立国会図書館デジタルコレクション、一八八九年、二頁。
- (44) 村上專精「因明トろじつくノ對照」六月の『哲学会雜誌』二十八号。一八八九年。村上に因明を教えたのは雲英である。村上二十五歳の頃に徹底的に因明の古典を教えている。その師を批判したのである。
- (45) 大西祝「論理学付録 因明につきて」『大西祝全集1 論理学』日本図書センター、一九八二年、七十三頁。大西と雲英の論争経緯は同書附録等四の七十四頁。
- (46) 村上專精『活用講述因明学全書』国立国会図書館デジタルコレクション、一八九一年、四五四頁。
- (47) 大西祝『全集1 論理学』日本図書センター、一九八二年、四頁。大西祝の因明に関しては、師茂樹「大西祝『論理学』における因明理解」www.academia.edu/41405728
- (48) 船山信一「明治論理学史研究」理想社、一九六六年、五十頁。
- (49) 師茂樹「明治における因明研究」www.academia.edu/1599404/明治における因明研究